

Paradise Lost について

——「禁じられた果実」を中心に——

飯沼 万里子

1960年5月に日本英文学会第57回大会において、*Paradise Regained* の ‘banquet scene’ と、*Paradise Lost*, Book V 中のアダムと天使ラファエルがともにする食事との関係を考察した時⁽¹⁾、Book IX のセイタンによるアダムとイヴの誘惑について触れないわけにはいかないと思い、誘惑の道具となる果実に関する詩行を読み直してみたのであった。Book V は食物と食事に関する巻とも言いたいほどであって、詩人はこの巻の四分の一ほどを、イヴが楽園の豊富な果実類によって整える食卓、アダムの勧めに喜んで応じさかんな食欲を示すラファエルの様子、そしてアダムとラファエルによる食物に関する問答などの描写に費して、我々は特に楽園の豊かさと、又その豊かに与えられるものを心から楽しむ様子とに心打たれる。Book IX の果実とそれを口にする場面の描写は、それが Book V の食卓によって象徴される楽園の幸福を奪うものであるからには、Book V の食物に関する詩行と拮抗する分量がさかれていて当然であるという風に考えたのである。ところが改めて Book IX を丁寧に読んでみると、果実に関する部分は数十行にすぎず、果実はまことにあっけなく食べられてしまうという印象を得て、実のところあわててしまったのであった。それは蛇の誘惑に会い、その誘惑に負けてしまうことになるアダムとイヴに内心の葛藤がなかったという意味ではなく、Book V の圧倒的な豊かさで語られる食物それ自体と食物のイメージに比較すると、禁じられている果実はあまりに簡素で、あまりにあっさり口にされてしまうと感じられたのである。そのために日本英文学会の口頭発表では、この果実を自分自身の考えの中にうまく位置づけられないままに臨むということになってしまった。*Paradise Regained*

まで視野に入れて考えねばならなかったということも原因であったかもしれない。それ以来、この禁じられた果実をこのままにしておくことはできない、自分の考えをまとめておかななくてはならないと感じてきた。ここに機会を得て、自分なりにこの果実について詳細に考察してみたいと考えている。

アダムとイヴに対する誘惑に一個の果実が使われるということについては、聖書にそのように書かれているかぎり変更することはできない。⁽²⁾『創世記』第2章及び第3章に書かれていることを要約すると、以下のようになる。神は楽園に人間を住まわせ、食べるのにふさわしい果実の木々を生じさせる。そして楽園の中心に生命の木とともににはえている善と悪の知識の木の果実は、食べてはいけない、食べるとその日のうちに死んでしまうと言う。さて楽園のすべての動物の中で最もさとい蛇はイヴに、あなたはすべての木の果実を食べてはいけないのかと尋ねる。イヴは食べてもよいのだが、楽園の中央にある木からは食べてはいけない、食べると死んでしまうと神は言われたと答える。蛇は食べたとしても死ぬことはない、それどころかあなたの目はひらかれ、善と悪を知り神々と同じようになれると言う。イヴはその木の果実が食べるにふさわしく、見た目にも喜ばしいと見てとり、果実を取って食べた。又彼女の夫に与えた。そして夫も食べた。

この人間の祖先の行為こそミルトンが彼の叙事詩の主題として選んだものであり、従って読者がこの果実に特別な重味を感じたとしても不思議はないであろう。詩人もこの果実について Book I の第一行目に、つまり *Paradise Lost* の最初に解れているのである。

Of Mans First Disobedience, and the Fruit

Of that Forbidd'n Tree, whose mortal tast

Brought Death into the World, and all our woe, ⁽³⁾
(I, 1-3)

しかしこのあと、Book II, Book III においては一度も触れられることはなく、

Book IV を待たなくてはならない。Book IX の誘惑の 場面に至るまでに、Book I から Book VIII にかけて、この果実に触れている個所は、約三十行にわたる Book V における イヴの夢の描写を除けば、七ヶ所を数えるにすぎない。従って Book V のイヴの夢は重要な意味を持ってくるのであるが、一方で、それ以外に詩人が七ヶ所しかこの果実について触れていないということは、この果実をこの作品の主題から言って最も大切なものだと考える読者の期待には反していることになる。まず詩人がその七ヶ所で、この果実についてどのように述べているのか見てみよう。

すでに *Paradise Lost* 冒頭の Invocation における 詩行は引用したので、次は Book IV である。セイタンが地獄から脱け出し、ついに楽園に侵入するこの巻において、読者もセイタンとともに初めて楽園の様子を知ることになる。ここに禁じられている果実が三度触れられていることは当然と言えよう。セイタンの探索に従って楽園の様子が描写され、禁じられている果実も次のように読者に紹介される。

Out of the fertil ground he caus'd to grow
 All Trees of noblest kind for sight, smell, taste;
 And all amid them stood the Tree of Life,
 High eminent, blooming Ambrosial Fruit
 Of vegetable Gold; and next to Life
 Our Death the Tree of Knowledge grew fast by,
 Knowledge of Good bought dear by knowing ill. (IV, 216-22)

つづいてアダムがイヴに楽園での生活について語る言葉の中に以下のように触れられる。

From us no other service then to keep
 This one, this easie charge, of all the Trees

In Paradise that beare delicious fruit
So various, not to taste that onely Tree
Of Knowledge, planted by the Tree of Life,
So neer grows Death to Life; what ere Death is,
Som dreadful thing no doubt; for well thou knowst
God hath pronounc't it death to taste that Tree,
The onely sign of our obedience left
Among so many signes of power and rule
Conferrrd upon us,

(IV, 420-30)

このアダムの言葉を身をひそめて聴いていたセイタンも、この果実について繰り返す。

Yet let me not forget what I have gaind
From thir own mouths; all is not theirs it seems:
One fatal Tree there stands of Knowledge calld,
Forbidd'n them to taste: Knowledge forbidd'n ?

(IV, 512-5)

Book V 冒頭のイヴの夢のあと、天使ラファエルの来訪があり、ラファエルはアダムの教育者として様々なアダムの疑問に答える。この愛想のよい天使はひたすらアダムのことを思い、良かれと思うことはすべて口に出す。

...not to touch the interdicted Tree,
If they transgress, and slight that sole command,
So easily obeyd amid the choice
Of all tasts else to please thir appetite,
Though wandring.

(VII, 46-50)

この epic narrator の言葉にあっても、又次のラファエルのアダムへの直接の戒めにおいてもその態度は見えよう。

...but of the Tree

Which tasted works knowledge of Good and Evil,

Thou maist not;

(VII, 542-4)

又 Book VIII における天地創造の壮麗な描写の中でも、神が人間を創造する場面を語る時機会をのがさず、神と人間との約束をアダムに思い出させるのである。

Of every Tree that in the Garden growes

Eate freely with glad heart; fear here no dearth:

But of the Tree whose operation brings

Knowledg of good and ill, which I have set

The Pledge of thy Obedience and thy Faith,

Amid the Garden by the Tree of Life,

Remember what I warne thee, shun to taste,

And shun the bitter consequence:

(VIII, 321-8)

以上が Book IX に至るまでの、Book V のイヴの夢を除いて、禁じられている果実について触れられている七つの個所である。それでは以上の引用はこの果実についてどのようなことを伝えているであろうか。Book I 冒頭の “the Fruit/Of that Forbidd’n Tree” にしても、Book VII, 46行目の “the interdicted Tree” にしても、まさに「禁じられている」という言葉が tree に対する限定語となっており、それ以外の性質を表わす要素は何一つない。Book IV におけるアダムのイヴに対する言葉の、“not to taste that onely Tree/Of knowledge” も「禁じられている」ことを碎いて述べているにすぎない。このことは

他の引用についても同様であって、更に念を入れて語られるにしろ、決してこれ以上の性質は付け加えられることはない。この果実は「禁じられている」、そしてこの果実を味わわないことが「人間の神に対する服従の証し」であるということである。もっとも Book IV においてセイタンは “One fatal Tree there stands of knowledge called,/Forbidd’n them to taste” と言い、“fatal” という形容詞をかぶせている。それはセイタンがアダムの言葉から得た知識を人間と神との間の約束の証しというよりは、自分の復讐心のために利用できる情報として受取り、セイタンの解釈により歪めているからである。しかしこの「死をもたらす」という性質は「禁じられていること」に付随しているものであることは、すべての引用に共通して述べられていることから明らかである。例えば Book I 冒頭では “whose mortal taste” と書かれている。又 Book VII におけるアダムに対するラファエルの戒めの言葉の中にも、先に引用した部分に続いて, “in the day thou eat’st, thou di’st;/Death is the penaltie impos’d,” と述べられている。従ってこの果実の性質は「禁じられている」と「死をもたらす」の二つであると言えることができるだろう。

それにしてもこの木、この果実の具体的なイメージを与えてくれるような限定語や、修飾節は一切ない。すでに確認した二つの性質によっては我々はこの木、この果実の具体的な姿を思い浮かべることはできないのである。ここで改めてすでに引用した Book IV, 216—22行を見てみたい。「神は肥沃な地から、見た目も香りも味わいも気高い、あるゆる木々を生じさせた。そしてその木々の中に生命の木が高くそびえていた。その木は神々の食物の味わいを持つ、植物性の黄金の果実をみのらせていた。生命の隣りに我々の死であるところの知恵の木が、びったりならんで立っていた。悪を知るという高い代償を払って買われた善の知識の木である。」この詩行によって我々は生命の木については具体的な描写を与えられる。高くそびえていること、高貴な味わいを持ち黄金色に輝く果実が実っていること。典型的なヘスペラスの園の果実のイメージと重ねあわせることができる。いかにも叙事詩にふさわしい伝統的イメージだと言えるだろう。それに対して知恵の木に対する素っ気なさはどうであろう。この

木については、どのような姿であり、どのような果実をつけていたかという点に詩人は全く触れていない。詩人が故意にこの木、この果実に対してこのような態度を取っていることは明らかである。Book V にあっては、ラファエルに供する食事を用意するためにイヴは心を砕いてさまざまな果実、漿果を吟味するが、そこで詩人は言葉を尽して楽園の植物の豊かさを描写しているからである。それは勿論、近代的な個性的描写ではないが、古典的な世界への言及を伴って黄金時代に拮抗する豊饒さを描き出している。⁽⁴⁾従って詩人は自ら意図して禁じられている木と果実については具体的表現を避けているのだと思われる。この木、この果実について触れる個所が少ないのもそのせいであろう。Book III の神が人間の未来について語る場面において、勿論人間が神にそむくことも予言される。しかし彼等と神との約束の証しであり、彼等の服従のかかっている果実については具体的には明示されないのである。神は果実については決して言及しない。例を挙げると次のように表現されている。

For Man will heark'n to his glozing lyes,
And easily transgress the sole Command,
Sole pledge of his obedience: So will fall (III, 93-5)

このことも詩人が意図的に禁じられている果実に極力触れないようにしている態度の表明と言えよう。

しかし詩人はこの果実が「美しくない」とか、「人目をひくものではない」といった限定語を与えていないことも確かである。それ故、読者が勝手に知恵の木、その果実を美しく魅力的な存在であると錯覚することはあり得るだろう。楽園がいかに豊饒さに満ちているかは繰り返して描写され、楽園では木々は豊かに実りをつけ、果実もいかに魅力的であるかは読者に深く印象づけられる。その例としてほんの二、三を挙げてみよう。

And higher then that Wall a circling row

Of goodliest Trees load'n with fairest Fruit,
Blossoms and Fruits at once of gold'n hue
Appeerd, with gay enameld colours mixt: (IV, 146-9)

Groves whose rich Trees wept odorous Gumms and Balme,
Others whose fruit burnisht with Gold'n Rinde
Hung amiable, *Hesperian* Fables true,
If true, here onely, and of delicious taste: (IV, 248-51)

...through Groves of Myrrhe,
And flouing Odours, Cassia, Nard, and Balme;
A Wilderness of sweets; for Nature here
Wantond as in her prime, (V, 292-5)

このように、あふれてなおあまりある自然の豊かさの描写に加えて、先ほども触れたイヴがラファエルのために用意する味わい豊かな果実の食卓があり、Book VII の天地創造の場面において次々と生み出される壮麗な植物のカatalogがある。読者が知恵の木とその果実もこの豊かさに結びつけたとしても不思議はない。楽園の豊饒さは念を入れて繰り返される。そしてこの豊かな楽園は

This continent of spacious Heav'n, adorn'd
With Plant, Fruit, Flour Ambrosial, Gemms and Gold, (VI, 474-5)

と描写される天国とほとんど相違がないと言っても良い。楽園の豊かさ、美しさこそは、神が人間を嘉みしたまうことの証拠なのである。

ここで今まで触れずにきた Book V 冒頭のイヴの夢を取り上げなければならない。セイタンの悪しき影響の下での夢ではあるものの、イヴは夢の中で禁じられた果実を口にするのであるから、読者にとっては大きな衝撃である。約

65行にわたるこの夢の描写の中で禁じられている果実に関する部分に重点を置いて引用してみよう。

And on, methought, alone I passd through ways
That brought me on a sudden to the Tree
Of interdicted Knowledge: fair it seemd,
Much fairer to my Fancie then by day:
And as I wondring lookd, beside it stood
One shap't and wingd like one of those from Heav'n
By us oft seen; his dewie locks distilld
Ambrosia; on that Tree he also gaz'd;
And O fair Plant, said he, with fruit surcharg'd,
Deigns none to ease thy load and taste thy sweet,

. . .

He pluckd, he tasted; mee damp horror chilld
At such bold words voucht with a deed so bold:
But hee thus overjoyd, O Fruit Divine,
Sweet of thy self, but much more sweet thus cropl,
Forbidd'n here, it seems, as onely fit
For Gods, yet able to make Gods of Men:
And why not Gods of Men, since good, the more
Communicated, more abundant growes,
The Author not impaird, but honourd more?
Here, happie Creature, fair Angelic *Eve*,
Partake thou also; happie though thou art,
Happier thou mayst be, worthier canst not be:
Taste this, and be henceforth among the Gods

. . .

So saying, he drew nigh, and to me held,
 Eev'n to my mouth of that same fruit held part
 Which he had pluckt; the pleasant savourie smell
 So quick'nd appetite, that I, methought,
 Could not but taste. (V, 50-86)

夢の中ではこの禁じられている木が、イヴの目には “fair it seemd, / Much fairer to my Fancie then by day” と写ったのである。「美しい」木と彼女は見たのであった。夢の中でイヴを誘惑する者はこの木に向って, “O fair Plant, …with fruit surcharg'd, / Deigns none to ease thy load and taste thy sweet” と呼びかける。この木は美しく、豊かな実りをたっぷりとつけ、その果実は甘美さそのものであると言う。誘惑者はなおも “O Fruit Divine, / Sweet of thy self, but much more sweet thus cropt” という言葉をこの木と果実に与える。果実の神々しさと甘美さが、特にその味わいが強調されている。そしてこの果実を口に押しつけられたイヴも, “the pleasant savourie smell / So quick'nd appetite,” と喜ばしくうまそうな香り、食欲を高める香りについて語る。果実はこの夢の中では様々な限定語を附されて、突如として具体的な存在となるのである。果実の美しさ、味わいの甘美さ、食欲をそそる香りが強調されている。そして他の場面において一切の具体性を持たなかった果実が、このように変化したのは、誘惑者の目で見、誘惑者の口で味わったからに他ならない。イヴは明らかに、この夢をひきおこしたセイタンの影響下に果実を見、味わったのである。

ところで美しい果実を讃美し味わい、食欲を満たすことそれ自体は樂園において許されているどころか、奨励されていることなのである。アダムとイヴが木蔭に憩い、食事を取る、即ち果実を食べることは何度か言及されるし、又天使ラファエルさえ、心からの食欲を示してアダムとイヴとともに食卓を囲むのである。豊かに産するものは惜しみなく味わうことが正しい行為なのである。Book VIII においてアダムはラファエルに、自分の誕生直後の経験について語

るが、その中に次のような個所がある。

A Circuit wide, enclos'd, with goodliest Trees
 Planted, with Walks, and Bowers, that what I saw
 Of Earth before scarce pleasant seemd. Each Tree
 Load'n with fairest Fruit, that hung to the Eye
 Tempting, stirrd in me sudden appetite
 To pluck and eate; whereat I wak'd, and found
 Before mine Eyes all real, as the dream
 Had lively shadowd:

(VIII, 304-11)

夢うつつのうちに神々しい姿に導かれて、木々が美しい果実をたわわにつけて
 いる場所へとやってくる。果実は目に誘いかけ、突然食欲を刺激され、もぎと
 って食べようとする目覚めて、眼前に夢見ていたものがそのまま現実とし
 てあるのを見たと言うのである。この描写はセイタンによってひきおこされた
 イヴの夢にほとんど重なると言ってよいだろう。行為として同じことが一方で
 は咎められず、他方では罪とされるのは、ただ一つの点、イヴが口にしたと思
 ったのが「禁じられている」果実であるということにかかってくるからである。
 アダムが夢の中で食欲を刺激された直後に、すでに引用した Book VIII, 321
 —8 行の、神がアダムに知恵の木の果実を食べることを禁ずる場面が続くのは
 十分に理由がある。楽園は沢山の豊かな実りをつけた木々にあふれていること、
 その美しさに目を奪われ、食欲を揚げられて、心ゆくまで食べてもかまわない
 こと、そしてただ一つだけ知恵の木の果実だけは禁じられていること。この
 「許可」と「禁止」の境界線は明快である。しかし「許可」側の描写の方が圧
 倒的であり、「禁止」の数行は豊かさの中に埋没しがちである。我々に重要な
 ことを暗示するイヴの夢の場面でさえ、その不安は、アダムが夢とはどういう
 ものかをイヴに語ってきかせることによって解明され、つづいて豊かな楽園の
 中の朝の時間が描写される。やがて天上から教育者として遣わされたラファエ

ルが到着し、アダムとイヴはラファエルを歓待するもてなしの席を設けて、楽園の豊饒さを読者に改めて認識させる。ラファエルは人間に劣らぬ食欲を示して食べ、アダムの質問に答えて食物の本質を説明し、又食物の比喩を使って人間がやがてその資質を変化させて天使の群と交わることができるようになること、即ち corporeal な存在から spiritual な存在へと変化し得るのだと語る。このためにイヴの夢がもたらした一瞬の衝撃はたちまち影を薄くしてしまうのであるが、そのことは詩人が意図したことであることは間違いないと思われる。

それでは Book IX においては果実はどのように扱われているであろうか。果実は蛇の身を借りて潜むセイタンの、イヴに対する誘惑の言葉に出てくるまでその姿を見せない。Book IX の冒頭でアダムとイヴは、楽園の仕事、生命力豊かに生い繁る植物の管理をどのようにするかということを巡って口論となり、二人は別れて仕事をするようになるのだが、その二人の口論の中でも果実のことは触れられることはない。果実は巻半ばに突然蛇の口から語られ、イヴの注目を引くことになるのである。しかし読者にとっては少しも唐突な感じはしないであろう。読者は *Paradise Lost* 第一行目に “Fruit” という言葉を目にした時から、この果実が作品の中でどのような役割を果すのかは十分に承知しているからである。だがイヴは蛇の言葉に好奇心をそそられて、禁じられている木に案内されて果実をその目で見るまで、当の果実のことは彼女の念頭に浮ぶことはないのである。セイタンは一人で仕事をしているイヴに、蛇の身体を借りて近づき、様々な動作を示して彼女の目を引きつけてから話しかける。イヴの美しさを賞讃することに言葉を尽し、イヴの心をすっかり捉えてしまう。人間にしか許されていない言葉を話す能力を蛇が持っていることに驚いて、イヴは何故おまえは話すことができるのかと尋ねる。蛇は楽園の中の一本の木の果実を食べた結果、外観は動物のままであるが、内部は一段階上って、理性が備わり、言語能力が生じたのだと言う。それはもしイヴが同じ果実を食べれば、一段階上って天使たちと交わることができるのだということを暗示し、その考えはおおいにイヴの気持を動かすのである。この蛇の言葉の中に Book IX に

おいて初めての禁じられている果実への言及があり、そして *Paradise Lost* 全巻を通じて、これほど言葉を費してこの果実について語られる個所は他にない。約45行にわたるセイタンの言葉のうちこの果実に関する詩行を引用してみたい。

Till on a day roaving the field, I chanc'd
 A goodly Tree farr distant to behold
 Load'n with fruit of fairest colours mixt,
 Ruddie and Gold: I nearer drew to gaze;
 When from the boughes a savorie odour blown,
 Grateful to appetite, more pleas'd my sense
 Then smell of sweetest Fenel, or the Teats
 Of Ewe or Goat dropping with Milk at Eevn,
 Unsuckt of Lamb or Kid, that tend thir play.
 To satisfie the sharp desire I had
 Of tasting those fair Apples, I resolv'd
 Not to deferr; hunger and thirst at once,
 Powerful perswaders, quick'nd at the sent
 Of that alluring fruit, urg'd me so keene.
 About the mossie Trunk I wound me soon,
 For high from ground the branches would require
 Thy utmost reach or *Adams*: Round the Tree
 All other Beasts that saw, with like desire
 Longing and envying stood, but could not reach.
 Amid the Tree now got, where plentie hung
 Tempting so nigh, to pluck and eat my fill
 I spar'd not, for such pleasure till that hour
 At Feed or Fountain never had I found.

(IX, 575-97)

この部分において、Book V のイヴの夢の場合と同様に、セイタンの目によって眺められた上で、木と果実が語られていることは明らかであろう。それ以外の個所ではこの木と果実がごく素っ気ない描写しか与えられていなかったことを忘れてはならない。蛇はこの木を“A goodly Tree”と言い、“Load’n with fruit of fairest colours mixt,/Ruddie and Gold”とその美しさを讃美する。その木は見事で、果実はたわわにみのり、果実の色は赤と黄金がまざり、この上なく美しい。この具体的な描写はすでに引用した Book IV における生命の木のに重なる。ここにおいて知識の木はヘスペラスの園の木のイメージを与えられる。そして“from the boughes a savorie odour blown,/Grateful to appetite”と甘美な香りが食欲をそそる。そしてその香りがいかに蛇を喜ばせたかを、「最も甘い茴香の香りよりも、夕方遊ぶことにかまけている小羊や小山羊が吸ってくれないので、乳をしたたらせている雌羊や雌山羊の乳房よりも喜ばしかった」と更に具体的に語るのである。Alastair Fowler の注によれば、茴香と乳房からの乳は蛇の好物だと考えられていたという⁽⁵⁾。それに加えて吸われることなくしたたる乳は、この楽園の描写の中で繰り返される過度なほどの豊饒、アダムとイヴの二人だけでは消費しきれず無駄になってしまうにもかかわらず絶えず生み出される植物の豊かさと相通じるところがある。楽園の豊かな自然の描写をすでにいくつか引用したが、その一つ、Book IV, 248行では木々は香ぐわしい樹液や香油をしたたらせているし、Book V 冒頭のアダムの言葉の中にも「没薬の木、乳香の茎がどのような乳液をしたたらせているか」(V, 23) という一行がある。ただ楽園に樹液をしたたらしているのは myrrh であり、balm であり、Book V, 293行にある cassia, nard 等と共に神々にもふさわしい高貴な香料の木々である。しかし蛇の感覚にとっては比較すべき対象はもっと卑近な茴香であり、更に卑近な羊や山羊の乳なのである。しかも具体的な情況まで添えられると、知恵の木はみるみる身近な存在となってくる。そしてついには“those fair Apples”と具体的な名前さえ登場してくるのである。知恵の木の果実を apples と呼ぶのはセイタンだけであることも注目した⁽⁶⁾。この果実は食欲をそそり、“the sharp desire”にまで高まって、どうしても

抗しがたく、ついに幹によじのぼって心ゆくまで食べ続ける。“Tempting so nigh, to pluck and eat my fill/I spar’d not” という部分は、先に引用した Book VIII, 304—11行のアダムの夢の行動にいかに近いかを改めて見て取れるだろう。Book V のイヴの夢がそうであったように、蛇の行為そのもの、つまり食欲をそそられて満ち足りるまで食べることにそれ自体は、樂園において何ら咎められることではない。それどころか奨励されていることなのである。それ故に食欲の対象が何であったかに気づかぬイヴは、この果実に好奇心を示す。だがこの蛇の言葉で見逃してはならない点は、これが真実ではないということである。真実の経験を語ったのではなく、すべては虚偽である。虚偽の中においてこそ、この果実は、言葉を費して「美しい」「感覚を喜ばせる」「食欲をそそる」と描写されるのである。この果実が「美しく」「甘美な」と写るのは、セイトンの見方で見た場合に限ることを改めて確認しておかねばならない。すっかり好奇心をそそられたイヴは蛇にその木へと案内させる。

So glisterd the dire Snake, and into fraud
 Led *Eve* our credulous Mother, to the Tree
 Of prohibition, root of all our woe; (IX, 643-5)

この epic narrator の言葉の中では、知恵の木は “the Tree/Of prohibition” とだけ述べられており、そこには何の具体的な描写もない。もっとも “root of all our woe” というすぐそこにさし迫った未来への暗示を伴ってはいるが。

Serpent, we might have spar’d our coming hither,
 Fruitless to mee, though Fruit be here to excess,
 The credit of whose vertue rest with thee,
 Wondrous indeed, if cause of such effects.
 But of this Tree we may not taste nor touch; (IX, 647-51)

彼女の蛇に対する答えにおいても、イヴは ‘this Tree’ とだけ、ごく素っ気なくこの木について述べており、「禁じられている」というこの木と切り離せない性質を付加えることも忘れてはいない。だが “Fruitless to mee, though Fruit be here to excess,” の一行はどう解釈すればよいのだろうか。イヴの口から我々は初めてこの知識の木が枝もたわわに果実をつけていることを知らされる。しかしそれは現実の目に写ったことの描写というよりは彼女の感情を告げる言葉であるということは subjunctive で語られていることで察しがつく。そして過度なほどに実りがあっても “fruitless” であるというのは、彼女の心に一たん萌した好奇心は消えず、意識の底にこの果実を食べたいという思いがすでにあるのだと言うことができるだろう。そして言葉遊びで応じている点からもイヴが蛇にすっかり心を許していることも見て取れるだろう。

イヴの「この木の果実は食べるどころか触れてもいけないのだ」という言葉に、蛇は「あなた方はこの宇宙の支配者であるはずなのに、神は全部の木の実を食べることを許さぬとおっしゃったのか」といぶかってみせる。これに対してイヴは次のように答える。

To whom thus *Eve* yet sinless. Of the Fruit
 Of each Tree in the Garden we may eate,
 But of the Fruit of this fair Tree amidst
 The Garden, God hath said, Ye shall not eate
 Thereof, nor shall ye touch it, least ye die. (IX, 659-63)

彼女は “yet sinless” である。そして神の命令、即ちこの果実を食べてはならないということをまだわきまえている。しかし “the Fruit of this fair Tree” という一行の中の “fair” という形容詞は見逃すことのできない決定的なものである。この “fair” は、Book V において彼女が見た夢を語る時に使った “fair” であり、蛇の言葉の中にあった “goodly” にも匹敵する。彼女の目はすでにセイトン的なものの見方へと引きずられている。これに勢いついた蛇は次のよう

に果実に呼びかける。

O Sacred, Wise, and Wisdom-giving Plant,
 Mother of Science, Now I feel thy Power
 Within me cleere, not onely to discern
 Things in thir Causes, but to trace the wayes
 Of highest Agents, deemd however wise. (IX, 679-83)

ここでは“Sacred, Wise, and Wisdom-giving”という風にこの木に与える形容詞が変化している。“sacred”はこの木を神格化し、崇める対象にして、その価値をより高いものと見せようとする姿勢を示すものであるが、“wise,” “Wisdom-giving”は知識の木というこの木に本来与えられていた名前の言い換えにすぎない。もっともその部分を強く押し出すことによって、イヴの好奇心を刺激しようと蛇は目論んでいるのであるが。従ってつづくイヴへの呼びかけの言葉においては、イヴの心から死への恐怖を取り除くために、人間として死んだとしても神性を身につけて生きるのだとこじつけ、ひたすら知識を得ることが即ち神々の一員となる道なのだと説明しようとする。

And what are Gods that Man may not become
 As they, participating God-like food?
 The Gods are first, and that advantage use
 On our belief, that all from them proceeds;
 I question it, for this fair Earth I see,
 Warmd by the Sun, producing every kind,
 Them nothing: If they all things, who enclos'd
 Knowledge of Good and Evil in this Tree,
 That whoso eats thereof, forthwith attains
 Wisdom without their leave? and wherein lies

Th' offence, that Man should thus attain to know?
What can your knowledge hurt him, or this Tree
Impart against his will if all be his?
Or is it envie, and can envie dwell
In heav'nly breasts? these, these and many more
Causes import your need of this fair Fruit.
Goddess humane, reach then, and freely taste. (IX, 716-32)

ここに引用した部分においても、“God-like food”という言葉で、イヴの神性を得られるかもしれないという期待へ働きかけ、知識というものを神々だけの所有物にしておくのは不当ではないかという風に持ちかけていくものの、果実自体については“this faire Fruit”というように“fair”という形容詞が再度登場しているだけで、新しいものは何一つ付加わっていない。もうその必要はないのである。

蛇の言葉は易々とイヴの心の中に入っていった。イヴの目は果実に釘づけになる。

Fixt on the Fruit she gaz'd, which to behold
Might tempt alone, and in her ears the sound
Yet rung of his perswasive words, impregnd
With Reason, to her seeming, and with Truth;
Meanwhile the hour of Noon drew on, and wak'd
An eager appetite, rais'd by the smell
So savorie of that Fruit, which with desire,
Inclinable now grown to touch or taste,
Sollicited her longing eye; (IX, 735-43)

彼女は見つめれば見つめるほど果実に心奪われていく。蛇の言葉は耳になおな

り響き、いかにも真実に思われた。視覚と聴覚、二つの感覚がすでに正しい認識力を失っている。そしてたまたま正午であったことも手伝い、食欲はそそられ、香りによって彼女の嗅覚も又刺激される。つづいて“touch or taste”の二語が来るのは当然のことであろう。それではすでに正しく働らかなくなった視覚を通じて、今彼女の目には果実はどのように写っているであろうか。いよいよ果実に手をのばしもぎとる直前のイヴの言葉を見てみよう。

Great are thy Vertues, doubtless, best of Fruits,
Though kept from Man, and worthy to be admir'd,
Whose taste, too long forborn,

• • •

Thy praise hee also who forbids thy use,
Conceales not from us, naming thee the Tree
Of Knowledge, knowledge both of good and evil;

• • •

...In the day we eate
Of this fair Fruit, our doom is, we shall die.

• • •

This intellectual food, for beasts reserv'd?

• • •

Here grows the Cure of all, this Fruit Divine,
Fair to the Eye, inviting to the Taste,
Of vertue to make wise: what hinders then
To reach, and feed at once both Bodie and Mind?

So saying, her rash hand in evil hour

Forth reaching to the Fruit, she pluckd, she eat: (IX, 745-81)

果実そのものに言及している個所を落とさないようにしたために、みっとも

ない引用となったが、まず“best of Fruits”と呼びかけ、“this fair Fruit”, “This intellectual food”, “this Fruit Divine,/Fair to Eye,”といった言葉でこの果実を描写する。だが、これらはすべて蛇の口によってすでに述べられたものの繰り返し、エコーにすぎない。イヴの言葉はセイタンの言葉を一步も出ることではない。丁度イヴがこの果実を食べることを決心するまでの理由づけが、やはり蛇の説得のすじ道をたどるのと同じように。イヴは完全にセイタンのものの見方に、思考方法に陥っている。それに対して彼女がついに果実をもぎとり、口にした時の epic narrator の単純なほど直截な描写においては、果実はただ“the Fruit”である。

一たん果実を口にするとイヴは食欲を抑えることができなくなり、飽くことなく食べ続け、酒に酔ったようになってしまう。まさにその酔って正しく見極めることのできなくなった目を示すかのように、木への呼びかけは一段と熱のこもったものとなる。

O Sovran, vertuous, precious of all Trees
 In Paradise, of operation blest
 To Sapience, hitherto obscur'd, infam'd,
 And thy fair Fruit let hang, as to no end
 Created;

(IX, 795-9)

彼女の目にはなおも「美しい」この木に対して、“Sovran, vertuous, precious”とこれを出るものはないほどの讃辞をならべている。これも蛇がこの木を神格化しようとした時の言葉“sacred”の反映にすぎない。事実このすぐあとイヴは毎朝讃歌を捧げようと木に約束する。この後彼女はアダムにもこの果実を味わわすべきかどうか思案したすえ、結果として予告されていた死に思いあたる。そして一人で死ぬことの恐怖からアダムにも果実を与えようと決意する。彼女がアダムに持ち帰る果実は次のように描写される。

...in her hand

A bough of fairest fruit that downie smil'd,

New gatherd, and ambrosial smell diffus'd. (IX, 850-2)

「彼女の手にはわた毛におおわれて微笑むようなこの上なく美しい、たった今摘まれて、神の食物かとまごう芳香を放つ果実の一枝があった。⁽⁷⁾」epic narratorによる描写ではあるが、イヴの目、イヴの思いを反影しており、彼女の墮落を明示している。そしてこの果実がヘスペラスの園の果実のイメージで語られるのもこれが最後である。この後も果実は「美しく、甘美な味わいを持つ」が、も早や黄金色に輝いたり、神の食物にまごう香りも放つことはない。この直後からアダム墮落へと視点は移るが、すでに述べたように、聖書においては果実を口にした理由がイヴの場合とアダムの場合では異なる。イヴは蛇の言葉を信じたから食べたのであり、アダムはイヴに与えられて食べるのである。イヴが蛇の言葉を信じて果実を手にするためには果実は美しく芳香を放つものでなければならなかった。アダムはイヴに与えられて果実を食べる。従って彼は自分の行為の意味するところをはるかに明確にわきまえていたはずである。果実の美しさ、芳香が彼を魅きつける必要はなかった。あたかもその差を示すかのように、この時点から果実は、ほんの一時身に帯びた美しさを少しずつ失っていく。

果実を食べるようにとアダムに誘いかけるイヴの言葉の中ですでに変化は見られ、イヴ自身ごく淡々と果実について語っている。彼女の理屈は完全にセイトンのそれであり、蛇が食べても死ななかったことと、蛇が人間の声と理性が与えられたように、自分自身の目も開け、神性を得たこと、その喜びをアダムと分かち合いたい、愛を二人が共にするように、運命においても、喜びにおいても共にしようと、彼の愛に訴えかけるのである。

This Tree is not as we are told, a Tree

Of danger tasted, nor to evil unknown

Op'ning the way, but of Divine effect
 To op'n Eyes, and make them Gods who taste;
 And hath bin tasted such: the Serpent wise,
 Or not restrain'd as wee, or not obeying,
 Hath eat'n of the fruit, and is become,
 Not dead, as we are threat'nd, but thenceforth
 Endu'd with human voice and human sense,
 Reasoning to admiration, and with mee
 Persuasively hath so prevail'd, that I
 Have also tasted, and have also found
 Th' effects to correspond, op'ner mine Eyes,
 Dimm erst, dilated spirits, ampler Heart,
 And growing up to Godhead; which for thee
 Chiefly I sought, without thee can despise.
 For bliss, as thou hast part, to mee is bliss,
 Tedious, unshar'd with thee, and odious soon.
 Thou therefore also taste, that equal Lot
 May joine us, equal Joy, as equal Love; (IX, 863-82)

イヴは果実を食べたことによってもたらされる結果を強調し、それを理由としてアダムに食べることを促す。しかしアダムにとって果実の外観が何の意味もないかのように、何の限定語もつけず “the fruit,” “the tree” と述べる。それに対して “taste” という言葉は何度も繰り返されるのである。

イヴの墮落を知った驚きを示す言葉においてアダムは、イヴの取り返しのつかない行為を嘆き、しかもイヴに対する絶ち難い思い、即ち「自然の絆」に引きずられる自分自身を感じる。その中で次のように果実に触れている。

Rather how hast thou yeelded to transgress

The strict forbiddance, how to violate

The sacred Fruit forbidd'n ?

(IX, 903-5)

「禁じられている聖なる果実」の“sacred”は神と人間の間に取りかわされた約束のために“sacred”なのであって、Book IX, 679行で蛇が果実に向って使った“sacred”とは全く意味が違う。アダムは明らかに墮落以前である。つづいてイヴに話しかける時、彼はイヴの犯した罪を少しでも軽いものとみなそうとし、蛇の先例から考えると我々も神性を得られるだろうとか、神は死を予告されたが、まさか本気で我々を滅すことはなさるまいとか、次第にセイトンの思考に陥っていく。彼は果実について次のように言う。

Bold deed thou hast presum'd, adventurous *Eve*,

And peril great provok't, who thus hast dar'd

Had it bin onely coveting to Eye

That sacred Fruit, sacred to abstinence,

Much more to taste it under banne to touch.

But past who can recall, or don undoe ?

Not God Omnipotent, nor Fate; yet so

Perhaps thou shalt not Die, perhaps the Fact

Is not so hainous now, foretasted Fruit,

Profan'd first by the Serpent, by him first

Made common and unhallowd ere our taste;

Nor yet on him found deadly, hee yet lives,

Lives, as thou saidst, and gaines to live as Man

Higher degree of Life, inducement strong

To us, as likely tasting to attaine

Proportional ascent,

(IX, 921-36)

“That sacred Fruit, sacred to abstinence” と正しい判断力によって果実の本質を把んでいることを示す言葉のあと、数行下において “fortasted Fruit” と述べる。「すでに味をみられてしまった」という言葉によって、果実は一度にその価値を下落させる。まさに “sacred” から “profan’d” へと。そしてそれは果実そのものが墮落したのではなく、アダムこそが墮落への道をたどり始めたことを示す。それと共に先に引用したイヴの言葉を反映するかのよう “taste” が繰り返して使われる。事実アダムはイヴへの愛に引きずられて、彼女と運命を共にすることを決意する。

このアダムの言葉をイヴは心から喜ぶ。予告されている死を、そしてこの禁を犯すことが罪ならこの罪を共にしようというアダムの決意こそを、彼女に対する愛の証しだと受取って、次のように述べる。

To undergoe with mee one Guilt, one Crime,
If any be, of tasting this fair Fruit, (IX, 971-2)

「神との約束の証し」は「愛の証し」へと変化し、アダムが果実を食べようと決意したのは彼女への愛故と信じるイヴにとって、果実は再度「美しく」写るのである。そして彼女は携えてきた枝から惜しげなく果実をもぎとってアダムに与える。

...from the bough
She gave him of that fair enticing Fruit
With liberal hand: (IX, 995-7)

“fair,” “enticing” と二つのセイタンの要素を示す限定語を持った果実によってアダムの墮落も決定的になる。アダムもイヴも食べれば食べるほど食欲を刺激されて食欲に食べ続け、ついに酔ったような状態に陥る。二人はこうして神性を得たのだと錯覚するが、事実はそれどころか、二人は肉欲に捉えられる。

...but that false Fruit

Farr other operation first displaid,

Carnal desire enflaming;

(IX, 1011-3)

ここに至ってついに果実には“false”という negative な限定語が被せられる。Book X 以後にも、もう数回この果実への言及がなされるが、そのうちのいくつかにも negative な形容詞が附せられる。勿論この果実そのものが変化したわけではない。元来、この果実は「禁じられている」ということを除いて一切の性質を表わす修飾語を持たない、目立たない存在であった。ところがセイタンの虚構にからめとられ、その世界から見ると“fair”となり、現実によってその期待が裏切られると“false”となるのは、人間の側の変化を示すのである。果実の本質は常に変ることではない。もっともアダムもイヴもまだこのことに気がついていない。だが未来を予知し得る epic narrator はこのように暗示をしのび込ませている。従ってまだ酔っぱらい、高揚した気分でアダムは次の言葉を語る。

*Eve, now I see thou art exact of taste,
And elegant, of Sapience no small part,
Since to each meaning savour we apply,
And Palate call judicious; I the praise
Yeild thee, so well this day thou hast purveyd.
Much pleasure we have lost, while we abstaind
From this delightful Fruit, nor known till now
True relish, tasting; if such pleasure be
In things to us forbidd'n, it might be wisht,
For this one Tree had bin forbidd'n ten.
But come, so well refresht, now let us play,*

As meet is, after such delicious Fare;
 For never did thy Beautie since the day
 I saw thee first and wedded thee, adorn'd
 With all perfections, so enflame my sense
 With ardor to enjoy thee, fairer now
 Then ever, bountie of this vertuous Tree. (IX, 1017-33)

今やアダムも完全にセイタンの思考に陥っており、イヴの味覚を賞め讃える。“taste”の縁語が“savour”, “palate”, “relish”とちりばめられ、果実は“this delightful Fruit”となる。彼の浮き浮きした気分は“savour”による言葉遊びにも見てとれる。しかしこの「喜ばしい」果実がすぐ後にどんな悲しみをもたらすかをアダムは知らない。そして“this vertuous Tree”の霊験がどのような効力を持っているのかも。

二人は抑え切れぬ肉欲にとらえられ、愛の戯れにふける。やがてその興奮が消えさり、重苦しい眠りを眠った後、自分たちがどのような状態に陥っているのかを悟らざるを得ない。すべての美德は失われ、今まで覚えたこともない恥辱を感じなければならなかったのである。この時、果実は次のように描かれる。

Soon as the force of that fallacious Fruit,
 That with exhilarating vapour bland
 About thir spirits had plaid, and inmost powers
 Made erre, was now exhal'd, (IX, 1046-9)

彼等自身もここに至ってはこの果実を“fallacious”とみなすのである。彼等自身がその精神状態の変化と共に「美しい」「甘美な」「香んばしい」「喜ばしい」とまつり上げた果実を、「偽りにみちた」と貶める。epic narratorの言葉ではあるが、明らかにはアダムとイヴの思いを反映している。そして我々はこの言葉がすでに墮落した人間によるものであることも注目しなければならない。彼等

が知恵の木の果実を食べて得たものはどのような知識であったのだろう。二人は「悪」を知り得たが、そのために「善」を失ったことを悟る。アダムという言葉の中のその部分を引用してみよう。

...since our Eyes
Op'nd we find indeed, and find we know
Both Good and Evil, Good lost, and Evil got,
Bad Fruit of Knowledge, (IX, 1070-3)

高い代償を払って、「悪」を得、「善」を失ったことを、アダムは“Bad Fruit of Knowledge”と言っている。「知識の悪しき実り」、即ち知ることがこのようなみじめな結果しかもたらさなかったことを嘆く言葉である。何と苦々しい言葉遊びであろうか。“fruit”という楽園の豊かさと人間への神の恩寵を表わしていた言葉が、このように空しい使われ方をするのである。蛇の巧みな言葉に誘われて知識の木へと導かれたイヴの言葉、Book IX, 648 行の“Fruitless to me”をここで思い出すべきであろう。彼女はまだ墮落以前であり、無邪気に言葉で戯れてみせたが、自ら気づかずに墮落を暗示していたのである。アダムとイヴはお互いを咎め、非難の言葉を投げあうが、その状態のままで Book IX は幕を閉じる。その部分を epic narrator は次のように描写する。

Thus they in mutual accusation spent
The fruitless hours, but neither self-condemning,
And of thir vain contest appeerd no end. (IX, 1187-9)

このように“fruitless”は墮落の状態を指し示す言葉にさえなっている。「禁じられた」果実を食べたことによって「神との約束の証し」は消えてしまったという意味において。

これ以後この果実に対する言及は九回行われる。Book X において六回、Book XI において三回である。Book XII においては一度も言及されない。一つ一つ見ていくと、まず Book X 冒頭において、人間がセイタンの誘惑にあって、「禁じられていた」果実を食べたことが、天国にも知れわたったことを語る epic narrator の言葉の中に続けざまに見られる。

...and how

Hee in the Serpent had perverted *Eve*,
Her Husband shee, to taste the fatal fruit,
Was known in Heav'n;

. . .

For still they knew, and ought to have still rememberd
The high Injunction not to taste that Fruit, (X, 2-12)

“the fatal fruit” と、果実に対する限定語が一層厳しいものになったように思われるが、しかしもともと「禁じられていた」果実は「死をもたらす」という性質をも備えていたのである。“not to taste that Fruit” と共に、神の目の下に果実は本来の姿に立ちもどったと言う方が正しいかもしれない。

つづいては神の御子によってアダムとイヴが裁かれる場面となり、

...hast thou eat'n of the Tree

Whereof I gave thee charge thou shouldst not eat? (X, 122-3)

と問う神の御子に対して、アダムは

Shee gave me of the Tree, and I did eate. (X, 143)

と答え、イヴは

The Serpent me beguil'd and I did eate.

(X, 162)

と言う。神の御子は蛇に対して、イヴに対して、裁きの言葉を与え、更にアダムには、

Because thou hast heark'nd to the voice of thy Wife,

And eat'n of the Tree concerning which

I charg'd thee, saying: Thou shalt not eate thereof, (X, 198-200)

彼の裁きに際して改めて神との約束を思い出させる。これらの単純極まりない詩行は、聖書からそのまま取られたり、或いはほんの少し変えられたりしたものであって、このようにして果実は一層明確に本来の姿にもどっていく。セイトンの思考の中で与えられていた偽りの美しさを落として、ただ神と人間との間の約束の証しという存在に。

神の御子による裁きの場面のあと、アダムとイヴは様々な試行錯誤の末に正しい信仰の道へと立ち返り、悔い改めるのであるが、その場面においては、もはや果実そのものに対しては一度も言及されることはない。人間に対するこの果実の役割はすでに終わったのである。ただかすかな余韻として、Book XI の冒頭の神の言葉の中に、

O Sons, like one of us Man is become

To know both Good and Evil, since his taste

Of that defended Fruit;

(XI, 84-6)

というように言及されるが、この場合も果実の本来持つ性質を確認しているだけのものと言えよう。そしてアダムとイヴを楽園から追放するという役目を神に命じられた天使マイケルは、二人が楽園を去る前に、アダムに人間の歴史を見せるのであるが、その時、墮落した結果、かつてより劣ったものとなったア

ダムの視力を回復させる。

...but to nobler sights

Michael from *Adams* eyes the Filme remov'd

Which that false Fruit that promis'd clearer sight

Had bred; then purg'd with Euphrasie and Rue

The visual Nerve, for he had much to see; (XI, 412-6)

「あの偽りの果実」と epic narrator は語っているが、勿論アダムは自らの罪のために視力を弱めてしまったのであり、果実が咎められるべきではない。彼は「目が開かれる」というセイタンの言葉を信じて果実を食べたのであった。ここで視力を回復するために使われている“euphrasy”（こごめぐさ），“rue”（ヘンルーダ）は、蛇が果実について語る言葉、Book IX, 561行目の“fennel”（茴香）と呼応していると思われる。⁽⁸⁾ セイタンの言葉が原因となって失われた視力が、神の御使いによってこのように取り戻されるのである。そしていよいよ最後に、アダムに彼の子孫たちの姿を見せる時に、彼はアダムの犯した罪が、子孫にも及ぶのだと語る。

Adam, now ope thine eyes, and first behold

Th' effects which thy original crime hath wrought

In some to spring from thee, who never touch'd

Th' excepted Tree, (XI, 423-6)

ここに我々は、その言葉は直接書かれていないが、アダムが Book IX において、自分の墮落を悟った時の嘆きである“bad fruit”を思い出すべきかもしれない。「禁じられていた」果実そのものは本来の姿に立ち返っても、人間の犯した罪、「禁じられていた」ものを食べてしまったことによる結果は、元に復することはないからである。

しかしこの作品において、“fruit”という言葉が空しい結果、悪しき実りを意味するようになったままで終わってはいない。この言葉自体も正しい意味を回復し、それどころか喜ばしい結果を示す個所があるからである。Book X においてアダムとイヴは紆余曲折を経て、正しい信仰へと立ちもどるのであるが、その時アダムは神の御子の裁きの言葉に思いあたる。神の裁きによれば、イヴは罪の償いとして出産の苦しみを味わわねばならない。しかしそれは即ち子孫に恵まれるという喜びではないだろうか。

...to thee

Pains onely in Child-bearing were foretold,
And bringing forth, soon recompenc't with joy,
Fruit of thy Womb:

(X, 1050-3)

この“Fruit of thy Womb”という言葉は『ルカ伝』第1章43節から取られたものである。洗礼者ヨハネの母エリザベツをマリアが訪ねてあいさつした時、エリザベツの胎内で子供がおどった。エリザベツは「あなたの胎の実も祝福されている」と言う。「あなたの胎の実」とは勿論マリアの胎内に宿る神の御子キリストのことである。マリアは第二のイヴと呼ばれるが、墮落直後のアダムの言葉の中にやがて人類を救うために地上に誕生することになるキリストへの言及がある。「禁じられた果実」そのものがキリストの予徴であるのかどうかは見極め難いが、明らかに両者は呼応しあっている。そしてこのような喜ばしい形で“fruit”の価値も回復されたのである。しかも Book X の最後で悔い改めて祈るアダムとイヴの姿を目にとめて、Book XI の冒頭で神の御子は次のように言う。

See Father, what first fruits on Earth are sprung
From thy implanted Grace in Man, these Sighs
And Prayers,

(XI, 22-4)

アダムとイヴが永遠に道に迷いつづけるのではなく、悔い改めて正しい信仰の道へと向い得たのも、神がそうしむけられたからであって、恩寵の賜物である。神の御子は恩寵を、神の蒔かれた種ととり、悔い改めのため息と祈りをその種から生じた果実とたとえたのである。やがて“fruit”となって胎内に宿るべき神の御子の口から語られる“fruit”，ここにおいて果実は fruitful な存在になっている。人間の空しい言葉遊びに神の御子も手を貸し、そうすることによって言葉を正しい意味に引きもどしたのである。喜ばしい実りという本来の意味に。又、上の引用において種を蒔くイメージを見た。ここに隠されている言葉“the Seed”も実は *Paradise Lost* においては重要な役割を担っている。しかしこの点については稿を改めて論じたい。そうすれば更に又、新たな植物的イメージの展開を見ることができることと思っている。

(拙稿は昭和60年9月14日、十七世紀英文学研究会関西支部第78回例会において口頭発表したものに加筆したものである。)

注

- (1) 日本英文学会第57回大会において、「ミルトンの二つの食卓 (*Paradise Regained* の Banquet Scene と *Paradise Lost*, Book V の食事)」というタイトルでなされた筆者自身の口頭発表を指す。
- (2) Dennis H. Burden は *The Logical Epic*, London, 1967. の第7章“The Provocative Fruit”においてミルトンがいかに聖書中の描写と *Paradise Lost* における果実の扱いとに、齟齬をきたさないようにしているかについて詳しく論じ、拙稿にとりあげたいいくつかの点について優れた考察をしている。
- (3) 引用はすべて *The Poetical Works of John Milton*, vol. 1, ed. Helen Darbishire, Oxford, 1952. に依る。
- (4) Anthony Low は *Milton Studies I* ed. James D. Simmons (University of Pittsburgh Press) 中の “Angels and Food in *Paradise Lost*” において、Book V における食物の重要性について論じている。又、特に pp. 137-9 において、中世と十七世紀の文人たちの植物に対する態度について述べていて興味深い。
- (5) *The Poems of John Milton* ed. John Carey and Alastair Fowler (Longmans), p. 891. を参照。
- (6) セイタンは Book X, 487 行において、地獄にもどって墮天使たちの前で自分の功績を誇る場面で、“an apple”によって人間を墮落させたと言っている。 *Paradise*

Lost でこの言葉が使われるのは二ヶ所である。

- (7) 851行目の “downie” という言葉を, Laura E. Lockwood の *Lexicon to the English Poetical Works of John Milton* (Burt Franklin, New York) によって調べて見ると “covered with down or soft hairs” という意味になっている。わた毛があるというのは apple にそぐわない。何か特別な理由があって ミルトンがこの形容詞を使ったのかは課題として残っている。
- (8) Alastair Fowler, p. 1003 の ll. 413-5 に対する注を参照。